

2019年6月5日発行

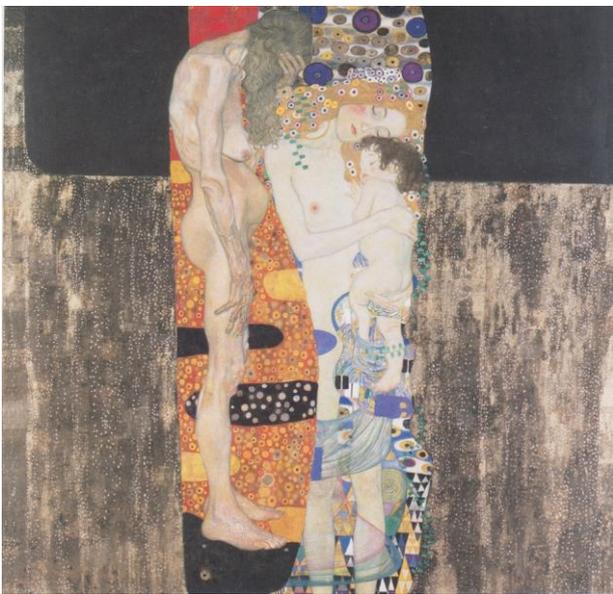
BiVS の本だな 第13号

獨協大学

図書館学生サポーター **ビボス**

Bibliothek **V**olunteer **S**upporters

美術館に行こう！ 【クリムト展】 鑑賞レポート特集



《女の三世代》

グスタフ・クリムト
1905年 油彩、カンヴァス 171×171 cm
ローマ国立近代美術館

7月10日（水）まで上野の東京都美術館で開催している「クリムト展 ウィーンと日本 1900」を図書館学生サポーターBiVSのメンバー4名が鑑賞してきました。クリムトの傑作を鑑賞して、BiVSのメンバーはどんな感想を抱いたのでしょうか。「クリムト展」に足を運んだら、是非とも注目してほしい作品について、熱くレポートしています。

楽園にたどり着くまでの旅路を描いた
《ベートーヴェン・フリーズ》に感銘

《ベートーヴェン・
フリーズ》
の画像（正面）
は 6 ページ

今回 BiVS が向かったのは、東京都美術館で開催中の「クリムト展」。クリムトの没後 100 年を記念して開かれたもので、過去最多のクリムトの作品が展示されている。ちなみに、東京都美術館は上野公園内であって、ちょうど上野動物園の隣に位置する。最寄り駅はもちろん上野駅だ。

「待て待て、クリムトとは誰ぞ？」とお思いの方もいるかもしれない。「名前は聞いたことあるなあ…」「金ピカの装飾で女の人の絵を描いた人？」ふむふむ。

クリムトは、19 世紀末のウィーンを代表する画家でフルネームでグスタフ・クリムト (Gustav Klimt) という。1862 年に生まれ、1918 年にその生涯を閉じたというから、50 数年の人生であった。よく知られた作品には《ユディット I》(1901 年) や《接吻》(1907-1908 年) がある。

とりわけ彼の、女性の裸体や妊婦などの赤裸々で官能的なテーマや、金箔を用いた装飾が有名である。もちろん人物画だけに徹したわけではなく、風景画もまた同様に描いている。ドイツ語圏の芸術の授業では、必ずと言っていいほどその名が挙がるから、覚えておいて損は無い。

(※彼についてもっと知りたい方は、BiVS のメンバーが選書したものをご覧あれ…！女性関係 (!) を赤裸々に綴った本もある)

そんなクリムト、あるいは彼と同年代の画家たちの作品がこの「クリムト展」に集った。どれも注目に値する作品ばかりだが、その中でもとりわけ筆者の印象に残ったのは《ベートーヴェン・フリーズ》(1901 年) である。

この作品はコの字に並ぶ壁画作品で、縦約 2 メートル、横 34 メートル、重さ 4 トンとかなり大きい。フリーズとはコンピュータ関連の用語ではなくて、建築用語で「建物の壁や、壁面の上の方などに飾られる装飾的な彫刻や浮彫、壁画」を意味する（日本語だと「装飾帯」とも訳される）。「ベートーヴェン」という名がついているけれど、あの作曲家のベートーヴェンと何か関係があるのかな？と思われた方は、勘が鋭い。実はこの作品は、ベートーヴェンに焦点を当てて 1901 年に開かれた、第 14 回ウィーン分離派 (☞分離派については BiVS 展示本『いちばん親切な西洋美術史』を参照) の展示会のために描かれたものである。では、何が描かれているのだろうか？まず、題材となったのは「第九」の名で知られるベートーヴェンの交響曲第 9 番である。クリムトはそこから 3 つのテーマ、すなわち①「幸福への憧れ」(左の壁)、②「敵対する勢力」(中央の壁)、③「歓喜の歌」(右の壁) を描いた。黄金の甲冑で武装した騎士が幸福を求めて敵に向かい、楽園にたどり着くまでの旅路が絵巻物のように展開し、天使たちによる合唱と男女の接吻で締めくくられる。クリムトの代名詞ともいえる金はもちろんのこと、ガラスや真珠層などを用いて歓喜を輝きの中に表現した様子がかがえる。しかし、哀しいかな、当時はこの作品があまりよく評価されず、「不貞」「淫欲」「不節制」を思わせる 3 人の娘たち (ゴルゴンの娘たち) などの人物描写は嫌悪を催したとされた。

なるほど、とりわけ③のテーマ「歓喜の歌」といえば第九のあの合唱であり、シラーの *An die Freude* (歓喜に寄せて) という詩が思い浮かんでくる。

ドイツ語学科 4年 伊藤 梨沙

生命感が溢れつつ、 死が潜む《ユディト I》

さらに、今回の「クリムト展」の展示は凝っていて、ただこの《ペーターヴェン・フリーズ》が並んでいるだけでなく、どこからか微かに『歓喜の歌』が聞こえるのである。ドイツ語学科ということもあってか（?）、思わず筆者はその歌詞を口ずさんでしまうほどであった。クリムトが描いた当時はこの合唱が流れていたかどうかは定かではないが、音楽と共に作品を鑑賞する機会はそうはないから、筆者としては実に新鮮味あふれる体験であった。

さて、このようにつらつらと「クリムト展」について筆者が語ったわけであるが、やはりそれだけでは「クリムト展」の魅力はなかなか伝わりにくいことだと思う。今このレポートを手に行っている皆さんには是非とも「クリムト展」に足を運んで、その目でクリムトや彼と同年代の画家たちの「息吹」を目撃してみしてほしい。その際は、図書館の資料で事前に知識をため込んで行くのもよいし、行った後にあれやこれやと背景を知るのもどちらでもよいと思う。皆さんが思い思いに作品を鑑賞できますよう…。



《ユディト I》

グスタフ・クリムト

1901年 油彩、カンヴァス 84×42cm

ベルヴェデーレ宮オーストリア絵画館

BiVS の「美術館に行こう！」シリーズ、ついに4回目となりました。2019年度初、令和初の今回は東京都美術館で開催中の「クリムト展」に行ってきました。私が初めてクリムトの作品を知ったのはヨーロッパのホテルに泊まった時のこと。宿泊した部屋に偶然クリムトの有名な作品の1つ、《接吻》が飾られており、黄金の装飾に目を奪われました。大学の講義でもクリムトのことを少し学んでいただけに、「クリムト展」に行くことはすごく楽しみにしていました。

BiVS の企画で東京都美術館に行ったのは「ムンク展」以来です。鑑賞した日が土曜日だったこともあり、館内には人が多く、なんとチケットを買うのにも長蛇の列が…！日本では過去最多のクリムトの作品が来ているということで訪れる人も多いのかもしれない。

さて、今回は「クリムト展」の中で特に印象的だった作品について書きたいと思います。今回、印象に残った作品は《ユディト I》です。大学の講義で取り扱われたこともあり、実物を生で見るのが夢だったので、実物を見ることができ、すごく嬉しかったです。この作品で描かれるのは1人の女性。恍惚とした表情が印象的で、一瞬綺麗な絵のように見えます。しかし、その腕が持つのは男の生首。実は綺麗な一言では終わらない深い絵です。この絵はタイトルからわかるように「ユディト」題材とした絵です。ドイツ語圏の画家だとクラナハも同じ題材で絵を描いています。

クリムトはこの絵だけではなく、多くの作品で「生」と「死」を同じ絵の中で対比させています。生命感が溢れつつ、死が潜む、それが彼の絵の特徴でもあります。そのため、クリムトの作品の中には花粉と雄しべ、精子と卵細胞のように生を表すものがよく描かれています。

《ユディト I》からわかるクリムトのもう 1 つの作品の特徴は金を多く使っているということです。彼の父親が彫金師だったことが影響していると言われています。金を使うことで絵がよりきらびやかに見えます。特にこの金の部分は印刷物で見ると、実物で見ると迫力が段違いでした。金が使われている作品は《ユディト I》以外にも展示されているのでそこも見どころの 1 つだと思います。

ドイツ語圏の画家ということもあり、展示品の中にはドイツ語が所々にありました。ドイツ語学科で勉強をしているので、細かいところを少し理解できたところも嬉しかったです。ドイツ語を勉強されている方はそこも是非、注目してみてください。

そしてこの特別展ですが、なんと 6 月 1 日から 14 日まで大学生は無料で鑑賞することができます！！通常 1300 円チケット代がかからない超お得な期間です！学生証と上野までの往復の運賃だけでなんとクリムトの作品が見放題です。浮いたチケット代で音声ガイドを借りて鑑賞するのもオススメです。私もこのお得な期間の間にもう一度訪れてゆっくりと鑑賞したいと思います。

少しでもクリムトに興味がある方は是非東京都美術館に足を運んでみてください。7 月 10 日までの特別展となっています。

また、鑑賞前、鑑賞後には図書館の資料でより知識を深めていただければ、と思います！

国際環境経済学科 1 年 小林 倭央

不思議と引き込まれてしまふ《鬼火》

休日の混んでいる展覧会に行ったのは初めてだったので、人の多さに少々戸惑ったが、クリムトの作品は想像以上だった。特に私の印象に残った 2 つの作品を紹介する。まず、《女ともだち I》である。漆黒の服を身にまとった 2 人の女性がおおり、その服の合間から市松模様が見える。ジャポニスムといえば、着物を着た女性が描かれている、クロード・モネの《ラ・ジャポネーズ》を思い浮かべるが、この《女ともだち I》は市松模様のさりげない感じがよかった。いかにもジャポニスムという感じではなく、ジャポニスムの要素がいいアクセントとなっていて、作品に溶け込んでいる点で個人的に好きだった。

そして、私の最も印象に残った作品は、《鬼火》である。鬼火とは、「伝承上では一般に、人間や動物の死体から生じた霊、もしくは人間の怨念が火となって現れた姿」(Wikipedia より)である。クリムトはそれを女性として擬人化し、作品に描いた。不思議と引き込まれる絵であった。残念ながら、《鬼火》が載っているクリムト関連の本は少なく、画像検索をしてみても実物とは明度が違う絵が出てきてしまう。実際に見に行くと、何故クリムトは鬼火を擬人化したか想像を巡らせてみるのも面白いかもしれない。

・クリムト、ひいてはウィーンに興味を持った方へ

新国立美術館では、8月5日まで「ウィーン・モダン クリムト、シーレ 世紀末への道」という展示が開催されています。クリムトの作品もいくつか展示されており、他にもウィーンの至宝の数々を見ることができるよう。クリムト展では見られなかったクリムトの作品が見られるかもしれません。もちろん学生証を見せれば、割引料金が観覧できます。ぜひ足を運んでみてください。

国際環境経済学科 3年

佐川 将大

リアルに感じられた
《ヘレーネ・クリムトの肖像》



《ヘレーネ・クリムトの肖像》

グスタフ・クリムト

1898年 油彩、厚紙 59.7×49.9 cm

個人蔵（ベルン美術館寄託）

19世紀末のウィーンを代表する画家であるグスタフ・クリムトの企画展に行ってきました。華やかな装飾で独自の感性の詰まった作品に私自身も魅了されました。展覧会を通じて感じたことをいくつか書かせていただきます。

自分自身の勉強不足もありますが、今回の企画展に行くまでクリムトのことは知りませんでした。土曜日ということもあり、会場は入口から混雑していて、改めてクリムトの人気を肌で実感することができました。また、いつも自分が美術館に行く際には音声ガイドは借りないのですが、今回はいい機会なので初めて利用しました。率直な感想として作品をより深く知ることができ、また周りを気にせず作品の世界観にどっぷりと浸ることができ、とてもいい経験になりました。次回、美術館に行くことがあれば、迷わず音声ガイドを利用したいと思いました。

まず、館内に入るとクリムトの写真が展示されていました。若いころから晩年までの写真があり、50代半ばにして亡くなったというのを聞いて驚きました。晩年の写真からはあまり画家という風貌ではなく世捨て人のような印象を受けました。

クリムト展とは言ってもグスタフ・クリムトの兄弟の作品や友人の作品も数多く展示されており、同じモデルを用いてクリムトと友人が書き比べた作品はとても興味深く、同じモデルでも画家によってここまで変わるものなのかと感銘を受けました。

クリムトの歴史とともに展示されていたため、作品の変化も楽しむことができました。中期から後期にかけてのクリムトの代表的な作品には金箔をつかったものなど豪華絢爛で鮮やかなものが増えており、日本の浮世絵の影響を強く受け作品にも取り入れているのがわかります。またクリムトの自宅のアトリエの写真では多くの日本の美術品の展示が写っており驚きました。人物画の多いクリムトですが、実は風景画の作品もいくつかあり、緑を基調とした鮮やかな作品が多かったです。

ここからは私が展覧会で鑑賞して感銘を受けた作品を紹介したいと思います。フランス・マッチェ作の《女神とチェスをするレオナルド・ダ・ヴィンチ》、《女ともだちI》、ベートーヴェンの曲を参考にした作品《ベートーヴェン・フリーズ》、ウィーン大学大講堂の壁画の天井装飾画である《哲学》と《医学》（ナチスに焼却されて現存していないため写真による展示）など気に入った作品は多数あります。

中でも《ヘレーネ・クリムトの肖像》（画像 5 ページ）はとても素敵でした。顔の描写は服の部分よりも断然書き込みが多く、生きているかのようにリアルにも感じられました。

機会があればまた足を運びたいと感じるとともに、たくさんの人におすすめできる企画展だと思います。



《ヌーダ・
ヴェリタス
（裸の真実）》

グスタフ・クリムト
1899年 油彩、カンヴァス
244×56.5cm
オーストリア演劇博物館



《ベートーヴェン・フリーズ》正面の壁「敵意に満ちた力」

グスタフ・クリムト
1984年（原寸大複製／オリジナルは1901-1902年、216×3438cm）
ベルヴェデーレ宮オーストリア絵画館

